

鉄道総研の

技 術

遺 産

File No.26

鉄道総研を象徴する彫刻

—柳原義達作「トリ(国鉄技術研究所
広場のためのモニュマン)」—

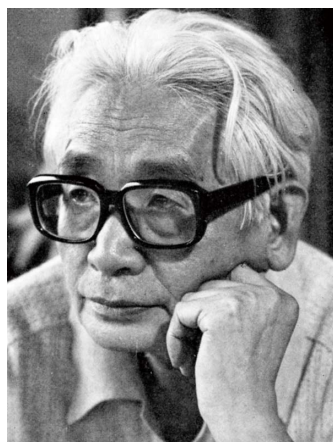
■ 広場の彫刻

国立研究所の正門を入ると、右手に池を前庭として駐車場と講堂が見えますが、その近傍の広場に前衛的なブロンズ像が建っています。この彫刻は、国立研究所の移転に際して、彫刻家の柳原義達によって制作されました。新しい研究所に何かモニュメントとなるオブジェを設置しようとする発想は計画時からあったようで、1959(昭和34)年頃に描かれた国立研究所の完成予想図にも、本館南側に「拳」のようなオブジェが描かれています。

研究所の記録によれば、この彫刻は1960(昭和35)年10月に設置したとされるので、浜松町から国立へ移転する第1期工事の完成にあわせて制作された作品でした。今回は、この彫刻の由来や見所を紹介したいと思います。

■ 柳原義達とその作品

彫刻の作者である柳原義達は、1910(明治43)年3月21日に神戸市で生まれ、兵庫県立第三中学校(現在の長田高校)を経て1931(昭和6)年に東



①柳原義達
「みづゑ」No.917
(1981-8) p.35より



②講堂前に建つ柳原義達作の彫刻、ブロンズ、H203 × W95 × L70cm

京美術学校(現在の東京藝術大学)彫刻科に進み、鉄道総研の講堂前にある後藤新平胸像と床次竹二郎胸像の作者である朝倉文夫からも教えを受けました。同校を1936(昭和11)年に卒業し、同じ年に小磯良平らによって結成された美術団体・新制作協会(設立時の名称は「新制作派協会」)に彫刻部が創設されるにあたって、1939(昭和14)年に会員となり、新制作協会展に作品を発表し続けました。

1952(昭和27)年には、フランスへ渡って彫刻家のエミール・オリコストに学び、さらにヨーロッパ各国を回り、1957(昭和32)年に帰国しました。1958(昭和33)年には第1回高村光太郎賞を受賞し、1960(昭和35)年の第24回新制作協会展に「トリ(国鉄技術研究所広場のためのモニュマン)」を

出品しました。

柳原の作風は、ロダンなどの正統派の西洋彫刻を基本としながらも、ヨーロッパで学んだ反アカデミズムの思想を取り入れながら、より斬新な造形に挑戦し続け、人物や鳥(からす、はと、鶏)を題材とした作品を数多く残しました。また、鉄道技術研究所のほかにも多数の屋外彫刻を手がけ、青葉城址の「伊達政宗像」(仙台市・1957)、向ヶ丘遊園の「フラワー・エンジェル」(川崎市・1964)、小郡農協会館の「耕す人々のために」(山口市・1965)、和田岬の「平清盛像」(神戸市・1968)、幣舞橋の「道東の四季「秋」」(釧路市・1977)などが知られています。

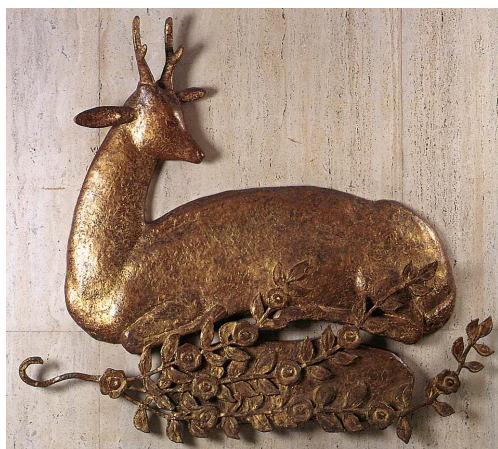
1970(昭和45)年には日本大学芸術学部教授となって後進を育て、1996(平成8)年には文化功労者に選ばれま



③第24回新制作協会展に出品された「トリ(国鉄技術研究所広場のためのモニュマン)」



④国立研究所完成予想図



⑥設置された頃の彫刻

⑤東京駅貴賓室の「鹿」
『駅美術を訪ねて』東日本鉄道文化財団(1995)p.74より

したが、2004(平成16)年11月11日に他界しました。

なお、三重県立美術館(津市)には、柳原義達記念館があって作品が展示されているほか、東京都江戸川区中葛西にある関口美術館でも作品が常設展示されています。

■彫刻に込めた思い

鉄道総合技術研究所にある彫刻は、「研究の成果が社会に貢献する」ことを象徴した彫刻として制作され、猛禽(鷲や鷹など)が空に向かって羽ばたこうとしている姿を表しています。また、造形のモチーフとしてコンパスやスケールを取り入れることによって「技術」が象徴されました。さらに、鉄道の軌道材料である犬くぎをそのまま彫刻に用いており、従来の彫刻の素

材にとらわれない自由な発想をうかがうことができます。

柳原は、エスキス(素案)として「トリ(国鉄技術研究所広場のためのモニュマン)」を制作し、1960(昭和35)年の第24回新制作協会展に出展しましたが、制作を依頼した経緯などは明らかではありません。

柳原は1947(昭和22)年に建築家・中村順平の総指揮によって東京駅RTO(連合軍鉄道輸送事務所)事務室に設置された壁面のレリーフ(現在は東京駅葉地下八重洲口付近に保存・展示)の制作に参画していたとされ、さらに1952(昭和27)年の渡仏前に、東京駅貴賓室のために「鹿」のレリーフを制作しているため、新制作協会を通じて国鉄と何らかの接点があったと考えられます。

また、1951(昭和26)年に上野駅コ

ンコースに完成した壁画「自由」は新制作協会の創設者の一人である猪熊弦一郎が手がけていました。鉄道技術研究所は、最先端のモダニズム建築として完成し、新制作協会が新しい時代の鉄道施設にふさわしい美術団体として選ばれた可能性が考えられます。

彫刻が設置されてすでに半世紀以上が経過しましたが、この彫刻によって表現された「研究の成果が社会に貢献する」というメッセージは、今も私たちの研究活動の支えになっています。

(小野田滋/情報管理部 担当部長)

文献

- 1) 柳原義達：現代彫刻センター，1981
- 2) 柳原義達：孤独なる彫刻－柳原義達美術論集－，筑摩書房，1985
- 3) 加藤薫，川村兼章：柳原義達の彫刻に関する一考察，国際経営論集(神奈川大学)，No.25，2003